

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

トリノの憂鬱：晩年のボッピオ教授

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 信一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/574

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



トリノの憂鬱 — 晩年のボツビオ教授 —

Le Spleen de Turin : Prof. Bobbio dans ses dernières années

村 上 信 一 郎

モーツアルト・バイオリン協奏曲第五番ト長調「トルコ風」

最後にお会いしたのはいつのことだったのか。そんな昔のことではないのに、沢山の古い手帳を繰ってみても、なかなかその日付が見つからない。そうだ。あの日はトリノで何かの見本市フェアがあったせいで、宿がなかなか見つからなかったのだ。もうこんな所しか残っていないけれど、と言いながらアルベルト・パプツツイさんが申し訳なさそうに、駅裏の安宿まで私を案内してくれたことを思い出した。いやいや、悪いのは、急に思い立ってトリノに行くと言い出した私の方です。おそらくは、そんなことから、私の手帳には宿の名前が残されなかったのであろう。

だが、手帳に記された前後の記録をあれこれと辿っていくなかで、それは二〇〇三年九月六日のことだと確信するに至った。その夜は、パプツツイさんが会長を務めるトリノ音楽ウニオネ・シカレ連合のコンサートが王立劇場テアトロ・レジョであり、そこに招待

されて、ウト・ウーギが演奏するモーツアルトのバイオリン協奏曲第五番ト長調K二一九番を聞いたのである。そうそう、この曲が「トルコ風」と言われる所以ともなった第三楽章ロンドを、ウーギがアンコールでも得意げに繰り返していた情景まで脳裏に甦ってきた。それにしても、どうして手帳に、その日のことを書き留めておかなかったのだろうか。

ノルベルト・ボツビオ教授のお宅は、トリノの中央駅であるポルタ・ヌオーヴァ駅の横を走る路面電車の軌道に沿ってながく続く、サッキ通六六番地にあつた。サッキ通は一八五三年に建築が始まつた折衷様式の凡庸な建物から成り立っており、アーケードのある一階には、洋装店や雑貨店や文具店や書店や喫茶店といつたごくありふれた商店が並んでいて、その上が住宅となつている。閑静な住宅街とはとてもいえない、都会の喧騒の絶えることがない庶民の街である。教授のお宅はアルプスの山々が遠望できる、その最上階にあつた。一九三四年以来二〇〇四年に亡くなるまで、教授は七〇年近くもそこで暮らし続けたのである。

私が最後にお訪ねしたのが二〇〇三年だとすれば、教授はその時すでに九三歳であつた。キケロに準えて教授が『老年について』を著したのは一九九七年、八八歳の時である（ちなみにキケロが紀元前四四年に同名の書を著したのは六二歳の時であつた）。その時から数えても、すでにもう六年が過ぎていた。たしかに老いさらばえたとはいへ、聳え立つがごとき高い鼻梁と猛禽類のような鋭い眼差には、いささかの変化もなかつた。だが薄暗い書齋で車椅子に座りながら語りかける姿は、私の知っている教授とはもうまるで別人のようであつた。私が形どおりの挨拶をし、二〇〇一年四月二二日に八四歳で亡くなつたヴァレリア夫人のお悔やみを述べようとしたとたん、教授はまるで何かに憑かれたように嗚咽し始めたのである。淋しいのです。悲しいのです。ヴァレリアは氣立ての良い伴侶でした。陽気で茶目つ

気に溢れ、私のような憂鬱質の悲観論者にとっては、本当に慰めであり、救いでした。ヴァレリアと一緒にだったことで、ヴァレリアのお陰で、ヴァレリアを通して、死とは何か、また愛とは何かを私は理解したのです。愛が死よりも強いということが分かりました。彼女はまだここにいます。私の胸の中にいます。でも私は年を取り過ぎました。淋しいのです。

親密とはとても言い難い、遠来のしかも異邦人の客にまで、もはや自らを繕おうともせず、取り乱すことをも厭わず真情を吐露しつづけながら、死から目をそらすことなく、真摯に死と向き合おうとしている一人の老哲学者を前にして、一体私には何を言葉にすることができたのであろうか。それについてはほとんど記憶がないのである。

バツハ・ヨハネ受難曲

ナタリーア・ギンツブルグにはチェーザレ・パヴェーゼを追憶する美しい文章がある。

「私たちの友だちが大好きだったこの町はいつも同じ。変わったとしてもほんのちよっぴり。トロリーバスが通ったり、地下道ができたりしただけ。新しい映画館はできなかつたわ。昔ながらの名前でやっている映画館ならあるけれど。そんな映画館の名前を繰り返し口にしてると、子どもの頃や若い頃を思い出してしまうの。」

それに私たちの町って根っからの憂鬱質なのよね。真冬の朝には、この町のものとかいいよのない駅からの臭いや煤煙の臭いが、街角や大通にまで漂ってきたわ。そんな朝、この町に列車で到着すると、霧で町は灰色に覆われてあの何ともいえない臭いに包まれているの。ときおり霧の中からは、微かな太陽の光が滲み出て、積もった雪の塊や葉の

落ちた木々の梢を薔薇色や薄紫色に染めていくのよ。

この町の本質的な性格というのは憂鬱質なのよ。ポー川は遠く消え去りそうになりながら、真昼でも夕暮れをおもわせる重色をした霧の地平の彼方に沈んでいく。どこにいたって煤煙の根暗で忙しげなああの臭いがして、列車の汽笛も聞こえてくる。

今気付いたんだけど、この町ってさ、この町が大好きだった私たちが失ってしまった友だちに、よく似ているんじゃないかしら。眉間に皺を寄せてひたむきに、一生懸命頑張っているかと思うと、どことなしにやるせなく、無為にひがな一日を過ごしたり、夢ばかり見つづけていた私たちの友だちに「レ・ピッコレ・ヴィルトゥー」
『ちっぽけな美德なんて』一九六二年）。

チエーザレ・パヴェーゼは、一九五〇年八月二七日ポルタ・ヌオーヴァ駅から近いホテル・ローマで睡眠薬を飲み、自殺した。四二歳の誕生日を迎える一三日前のことであった。パヴェーゼはボツピオよりも一歳年長で、二人はトリノの名門校の中等高等学校マッシモ・ダゼリオに入学して以来の友人であった。また後にナタリーアの最初の夫となるレオーネ・ギンツブルグも、ボツピオと同じ一九〇九年に、ウクライナのオデッサに生まれた富裕なユダヤ系ロシア人貿易商の息子で、ダゼリオ高等学校の同級生であった。この三人はダゼリオ高等学校で恩師アウグスト・モンテイの薫陶を受け、それぞれのやり方で反ファシストの道を行くことになる。だがその後の運命は大きく異なったものとなった。なかでもレオーネ・ギンツブルグは、妻のナタリーアと三人の幼い子どもを遺したまま、一九四四年二月五日にはローマのレジーナ・チエーリ刑務所で拷問により獄死してしまう。まだ三四歳であった。

このようにボツピオは、自分が生涯を終える六〇年も前に、反ファシズム闘争に献身した親友の一人をナチ・ファシ

ストの拷問によって失い、五〇年以上も前に、反ファシズム闘争を生き延びたもう一人の親友をも自死によって失っていたのである。運命の悪戯というにしては余りにも大きな違いであった。ポツビオは長生きをすればするほど、記憶のなかでは、かえって鮮やかとなっていく若くして亡くなった親友たちの不条理な死についても、自分が死ぬまで彼らの分まで煩悶し続けなければならなかったのである。

ポツビオは、ファシズムやナチズムや共産主義やネオ・ブルジョワ社会が悪かったというよりも、近代がもたらした無神論すなわち超越論の放棄こそが諸悪の根源であるとするアウグスト・デル・ノーチエと一九八九年に交わした往復書簡のなかでこう述べている。「絶対悪マレ・アッソルートというものが、もし仮にあるとするならば、ちよつと逆説的な言い方をすれば、それは大文字で書くところの歴史です。歴史は今までのところ、自分自身のための救いレデンプツィオーネを何一つ見いだしてはいないのです」。

歴史には今のところ贖罪レデンプツィオーネすなわち犠牲による罪のあがないなどない。これがポツビオの悲観論の根底に横たわる歴史観であった。ならば救いはどこにあるのか。ポツビオは二〇〇〇年にこう書いている。

「私は信仰の人間ではなく理性の人間ですので、あらゆる信仰を信じませんが、宗教と宗教的なるものとは区別してあります。宗教的なるものというのは、私にとっては、たんに自分の限界の感覚を持つということの意味するにすぎず、また人間の理性が、廣大無辺の宇宙と比べれば、一隅を照らす小さな燭台でしかないということを意味するにすぎません」。

「究極の問いに答えが見出せないまま、人生の終わりに辿り着いたと感じるとき、私の知性は辱められているのです。そう屈辱です。でも私はこの屈辱を受け容れます。それを認めます。私には踏み出すことができない道である信仰に

よって、この屈辱を乗り切りたいとは思いません。私の理性は限られたものであり、辱しめられたものです。でもそうした理性を持つ人間のままでいたいと思います。私は知らないということを知っています。これが《私の宗教的なるもの》なのです」。

「悪の問題や、悪意に満ちた正義の配分の問題には、答がありません。スターリンは自分のベッドの上で死に、ピノチエトも自分のベッドの上で死ぬでしょう。そしてアンネ・フランクは絶滅収容所で死にました。暴君たちはベッドの上で死に、何の罪もない少女が強制収容所で死ぬ。何によってもそれは正当化できません。端的に言って恐ろしいことです。神様の判断は不可解だ、といっても答えたことにはなりません。それは答ではなく、信仰の証でしかありません」。

「説明しえないことが、説明の原理となりうる。捉えられないものが、答えを与えるための定点となる。認識しえないものが、私たちの認識の源泉となりうる。測りえないものが、物事の根底にまで辿り着くことを、私たちに可能とする測定器となりうる。そんなことは、私にはとても理解しがたいことなのです。口で言い表せないことについては、何と言うことができません」(『宗教と宗教的なるもの』『ミクロメガ』二〇一〇年二月号に再録)。

ボツビオと生前会って話すことは一度もなかったが、カルロ・マリア・マルティーニ枢機卿は二〇〇四年のボツビオの死に際し、彼のこうした考察に心からの共感を表明していた。

マルティーニは、一九二七年にトリノに生まれたイエズス会士の聖書学者で、教皇ヨハネ・パウロ二世によって一九七九年にミラノ大司教に任命され、二〇〇二年に七五歳の定年で大司教を辞めたのちは、イエルサレムの教皇庁立聖書研究所に居を移していた。彼がミラノ大司教のときには、一九八七年以来、毎年「カワテドフ、ディン、クワソニテ信仰なきものの講座」を

主催するなど、教会の外で生きる人々との対話にも努めていた。そこからは、例えばウンベルト・エーコとの共著『信仰なきものは何を信じているのか』(一九九六年)など、重要な成果が数多く生み出されている。

マルテイーニ枢機卿はボツビオのいう「宗教的なるものの感覚」すなわち「私たちをとりかこむ根本的なこの深い神秘の感覚」は、まさに自分自身が日々感じてきたものであり、その限りにおいてボツビオと自分を隔てるものは、ほとんどないと述べている。そればかりか「実存の意味に関わる問いを前にして、安易な答えて満足することなく、真摯に向き合うことの重要性を多くの人々に示すことができる、屈辱と苦悩に満ちた探求心をもった模範であり、誠実さと信頼の深さをもった模範である」として、ボツビオに対し最大級の敬意を表するとともに、少なくとも知性の次元においては、ボツビオの救済に関する懐疑と悲観論をも含めて、二人のあいだを根本的に隔てる溝についても、深い理解を示していたのである。

ノルベルト・ボツビオは二〇〇四年一月九日午後五時に亡くなった。享年九四歳であった。四年前の九〇歳の誕生日には、次のような遺言を遺していた。「死を想うほどの疲れを癒してくれるものは、死によって永遠の安息を得ることではない。《主よ、永遠の安息を彼らに与えたまえ》。パツハのヨハネ受難曲で、イエスの死の直後に歌われる最後のひとときわ美しい合唱《安らかにお眠り下さい》。そして「私は、自分が無神論者であるとも、不可知論者であるとも思っていない」。しかし三〇年以上も前から「市民としての葬儀」、すなわち「簡素で公的ではなく私的な葬儀」を強く望むと述べていた。とにかく葬儀は静寂に短く。美辞麗句を並べた鬱陶しい弔辞は一切無用。葬儀後ただちにリヴァルタ・ボルミータ(アレッサンドリア県)にある家族の墓に埋葬のこと。墓碑銘には氏名と生没年月日及び「ルイーダとローザ・カヴィリアの息子」とのみ刻むように、と。

二〇〇四年一月一日午後二時三〇分にボツビオ教授の亡骸は、一九四八年以来三〇年にわたって法哲学や政治哲学を講じてきたヴェルデイ通八番地にあるトリノ大学の本部棟レトトライトに移され、その大講堂アウラ・マーニヤで通夜が営まれることになった。真つ先に駆け付けてきたのは、行動党において反ファシズム闘争の体験を共有した親友の第一〇代イタリア共和国大統領カルロ・アゼリオ・チャンピであった。ごく少数の内輪で営まれた非公開の通夜の席では、故人の願いどおり、バッハのヨハネ受難曲が静かに流されていたという。

ここで言い添えておくならば、ボツビオは社会党出身のサンドロ・ペルティーニ大統領によって、一九八四年に終身上院議員に任命されていた。それもあって、ボツビオの遺志に反することにはなるとしても、公人としてのボツビオに對する弔問をすべて拒否することは、遺族にとって不可能なことであった。大統領のみならず上下両院議長、トリノ市長、その他政財界の要人も多数弔問に訪れた。そして大講堂での弔問が翌日午後一時までトリノ市民にも公開されたことよって、ボツビオの通夜は事実上の「市民葬」という形をとることになった。その日も、七千人から八千人ものトリノ市民が、長蛇の列をなして弔問に訪れたという。

いずれにせよ、カトリック教会で、ボツビオのためのミサが執り行われるということはなかった。ボツビオの亡骸は、遺言どおり、内輪の葬儀の後、ただちに家族の墓地に埋葬された。

自由主義革命

あたふたとタクシーに乗り込んだ時には、もう午後六時を回っていたであろうか。せっかくトリノにまで来てくれた

のだから、ぜひ会ってらっしゃいよ。カルラ・ゴベッティの有無を言わせぬ勧めにより、思いもかけず私がノルベルト・ボツビオのお宅を訪ねることになったのは、一九九四年九月八日のことである。カルラは夫のパオロや彼の母アーダ・ゴベッティとともにファプロ通六番地の自宅に、一九六一年ピエーロ・ゴベッティ研究センターを開設し、その運営に携わっていた。またボツビオがその所長を務めていた。

そしてそのころアーダ・ゴベッティ著『バルチザン日記―一九四三―四五年』の日本語版の監修をしていたイタリア・アナキズム研究―一九八八年にはナポリ大学叢書の一冊として『エトリコ・マラテスターマツツイーニからバクーニンへ』を上梓した―でも知られている戸田三三冬の紹介によって、私はたまたまこの研究センターに立ち寄ったにすぎなかった。ミサトの親友だったカルラの好意のおかげで、私は老碩学のお宅を訪問するという思いがけない榮譽を得ることになったのである。

それにしてもピエーロ・ゴベッティは不思議な人物である。一九〇一年にトリノで生まれ、一九二六年にパリで客死した。わずか二四年たらずのあまりにも短い生涯であった。それにもかかわらず第一次大戦後のトリノ文化を代表する文化人として、思想家として、いまだに語り継がれ、論じ続けられているのである。

食料品店の一人息子として生まれたピエーロは、一七歳となってトリノ大学法学部に入学するやいなや、三人の友人とともに九月二〇日通六〇番地の自宅を編集部として、月に二回発行する雑誌『新しいエネルギー』^{エネルジー・エ・ノーツ}を創刊した。一九一八年一月のことであった。疲れ切ったトリノに思想の運動を起こし、死んだようなトリノを目覚めさせたいというのである。その友人の一人が、後に妻となるアーダ・プロスペロだった。王室御用達の裕福な果実店の一人娘であるアーダは、ピエーロよりも一歳年下で、同じ建物の違う階に暮らしており、同じ中学と高校に通った幼なじみであっ

た。一七歳と一六歳の若い二人は、同人誌の刊行と同時に婚約もしていただいたのである。

それにもまして驚くべきことには、まだ一七歳の「エジレ・ヒヨンド・ミオベ・ラガツィーノ華奢で金髪の眼鏡をかけた少年」が発行するこの雑誌には、フィレンツェにあつて週刊紙『ウニタ統一』を通して彼らに強い刺激を与えた歴史家で南部問題の解決など様々な政治社会改革を唱えたガエターノ・サルヴェーミニのみならず、自由主義経済学者として定評のあるトリノ大学財政学教授のルイー・ジ・エイナウディ、さらにはイタリア観念論を代表する哲学者ベネデット・クローチェやジョヴァンニ・ジェンティレといった錚々たる知識人までもが寄稿していたのである。

およそ半年後の一九一九年五月一日に、トリノで社会主義文化の週刊紙『オルディネ・ヌオヴォ新秩序』を創刊したアントニオ・グラムシやアンジェロ・タスカやパルミーロ・トリアッティやウンベルト・テラチャーニは、ゴベッティよりもそれぞれ一〇歳、九歳、八歳、六歳年長であつた。この四人は、すでに社会党トリノ支部共産主義グループとしての活発な言論活動を展開しており、やがてはソヴィエトに範をとつた工場評議会運動にも着手していく。ゴベッティ自身も「イタリアで最も知的な新聞だ」と『新秩序』を高く評価していた。ところがそんな四人からすれば、ゴベッティは知つたかぶりの未熟な観念論者にすぎず、その雑誌も「パラスチティ・サッラ・カルトゥラ文化の寄生虫」(トリアッティ)でしかなかつた。とはいえゴベッティが一九二〇年二月に突如自己批判して、この雑誌の休刊を宣言すると、グラムシは『新秩序』の演劇批評欄を、ゴベッティに委ねることになるのだが。

ところが、ゴベッティが驚異的な不屈の精神を発揮するのは、それからである。一九二二年二月一二日に週刊誌『リヴォルト・オーネ・リベラレ自由主義革命』を創刊する。そして権力奪取への道をひた進んでいたファシズムとの壮絶な戦いを、その紙面上で繰り広げていくことになる。ピエーロとアータは一九二三年一月に結婚した。ほどなく住居は現在「ピエーロ・ゴ

ベッティ研究センター」のあるファプロ通六番地に転居したが、編集部は九月二〇日通六〇番地のままであった。警察に逮捕され、家宅捜査やファシストの暴行を受け、何度も押収されながら、一九二五年一月まで『自由主義革命』を発行し続けた。そればかりかゴベッティ出版社まで立ち上げる。一九二四年から二五年にかけて、およそ一〇〇冊もの書籍を刊行した。ルイジ・サルヴァトレッリの『民族ファシズム』やグイド・ドルソの『南部革命』あるいは後にノーベル文学賞を受賞するエウジェーニオ・モンターレの処女詩集『烏賊の骨』といった、今でも読み継がれている優れた作品を世に送り出している。

だが一九二六年二月三日、すでに心臓を病んでいたピエーロは、ついにパリへと亡命の旅に発つ。前年一月二八日に息子パオロが生まれたばかりである。そこで先ずは一人で旅立った。しかし二月一五日には気管支炎が悪化して、死亡。妻アーダと幼子パオロをトリノに残したままである。享年二四歳。あまりにも早すぎる死であった。

それから一七年後の一九四三年九月、アーダは再婚した夫のエットーレ・マルケジーニや一八歳になったパオロとともにパルチザン部隊を組織して、ナチ・ファシストに対する武装レジスタンス闘争に参加していくことになる。その記録が『パルチザン日記』であった。

「ファシズムは民族の自叙伝である」。ピエーロ・ゴベッティは『自由主義革命』（一九二二年一月二三日号）でそう断言していた。のちにファシズムを、健康な身体に突如発症した病気のようなものだとして、統一以降のイタリア自由主義国家を擁護したベネデット・クローチエとは、真つ向から対立する主張であった。じつさいクローチエは一九三二年に著した『一九世紀ヨーロッパ史』でこう述べている。「もし政治史においても芸術作品と同じく傑作といえるものがあるとすれば、イタリアの独立・自由・統一の過程は、一九世紀の自由主義民族運動の傑作というに

値するであろう。「この過程は、かつて同じイタリアを舞台に《ギリシアの復興》^{リソルジメント}が語られたごとく、《民族復興》^{リソルジメント}と名付けられたが、じつはそれは《民族勃興》^{リソルジメント}であった。何世紀もの歴史を通じて初めて、すべてのイタリア民族を含むところのイタリア民族だけからなるひとつの理想によつて形づくられたイタリア国家が、誕生したのである」。

ところがゴッペティからすれば、ファシズムは、リソルジメントが共和主義的な民族革命なき王朝による国家統一に終わったことから始まる、イタリア民族の政治的頹廢の最終的な帰結に他ならなかった。イタリア民族の卑屈で狭量な奴隷根性の露呈に他ならなかった。だから「ムッソリーニには何も新しいものはない」と考えたのである。「ムッソリーニにも国王ヴィットーリオ・エマヌエレにも支配者の力量などないのに、イタリア人の方が奴隷根性を抱いてしまっているのだ」。したがって「我々の反ファシズムはイデオロギーであるよりも前に本能である」。「世界には不屈の価値が一つある。それは非妥協である。我々はこの瞬間から、ある意味では、すべてに絶望した非妥協の聖職者とならざるをえない」。

ゴッペティは一九二三年に、自らの出版社から、学位論文『ヴィットーリオ・アルフィエーリの政治哲学』を出版していた。アルフィエーリは、一七四九年にピエモンテはアステイの貴族の家に生まれ、ヨーロッパ中を遍歴して恋愛に情熱を注ぐなか、母語のフランス語ではなくイタリア語による劇作に目覚めて数多くの傑作を残し、あらゆる圧政と闘う自由な民衆によるイタリアの再興を希求しつづけた、啓蒙主義からロマン主義への過渡期を代表する反逆的^{リベルタリー}な自由思想家であった。ゴッペティは、自らの出版社から刊行した書籍の表紙にアルフィエーリの「奴隷と一緒に何ができるというのか」というギリシア語のロゴタイプを印字していた。また一九二六年の死後出版となった息子カルロへの献辞を持つ『英雄なきリソルジメント』でもアルフィエーリに即して、隷属の時代があればこそ独裁者を敢然と見

下す自由の精神の高みに立って、道徳的な非妥協の抵抗を貫くことが肝要であると述べていた。

さらにゴベッティは、アルフィエリをとおして、『テイトゥス・リウイウスの最初の一〇巻に関する論考』^{ドイツ語}第一冊第四章で「ローマの平民と元老院の軋轢ディズウニオーネこそが共和国を自由で強力なものとした」とする共和主義者ニココロ・マキャヴェッリを再発見していた。ゴベッティもまた対立や闘争なくしては真の自由は生まれないと考えていた。したがってゴベッティの自由主義革命とは、反ファシズム闘争におけるイタリアの共和主義の伝統に根ざしたリソルジメントの継続と徹底を意味するものに他ならなかったのである。

行 動 党

ノルベルト・ボツピオは、一九〇九年一〇月一八日にトリノで生まれた。父親のルイジ・ボツピオは、サン・ジョヴァンニ病院の外科部長を務める著名で裕福な医師であった。自家用車が二台もあり、二人の召使と一人のお抱え運転手がいた。そして夏休みともなれば田舎の別荘で過ごすという典型的な都会のブルジョワ的中産階級の家庭に育った。

とはいえ田舎では、裸足で走り回る農民の子どもたちとも一緒にあって、朝から晩まで遊び回った。そこは子ども同士、暮らし向きや階級の違いなど臆することなく、本当に仲の良い遊び友だちとなった。しかしその翌年の夏休みに田舎に戻ってくると、必ず遊び友だちのうちの誰かが、結核で死んだと知ることになる。だが都会の学校の級友が病気で死んだという記憶は全くない。ボツピオは、こんな理不尽きわまりない貧富の差や強者と弱者の間の不公平に、どうしようもなくやりきれない気持ちを抱いたことから、政治に関心を持つようになり、何らかの形で政治にたずさわる「義

務」を感じるようになった。それとともに自分を、いつも「左」側の人間だと考えるようになったという。それから半世紀以上ものちの一九九四年の著作『右と左―政治的区別の理由と意味』にもそう記している。

だがボツビオは、生まれながらの政治的人間ではなかった。もともと病弱で憂鬱質であったせいか、シヨーペンハウアーやニーチェなどを好んで読む早熟な文学少年であった。そのころからの愛読書となったのはトーマス・マンの『魔の山』で、「世界の死の乱舞のなかからも、私たちのまわりの雨まじりの夜を焦がすこの陰鬱な狂乱の炎からも、いつか愛が生れいずるのであろうか」という最後の一節を生涯忘れることはなかったという。

こうして名門校のダゼリオ中等高等学校に進学し、グラムシの友人であった哲学のジーノ・ジーニ先生や、自分よりも二〇歳も年少のゴベッティの衣鉢を継いだラテン語とイタリア語の AUGUST・モンティ先生から反ファシズムについての多大な影響を受けてはいたものの、博学にして秀才の誉れ高い級長のレオーネ・ギンツブルグのように、直ちに行動に転じようとする強靱な意志の持ち主とはいえなかった。その後トリノ大学法学部に入学するが、父親も一九二三年以来のファシスト党员であり、彼自身も一九二八年からファシスト学生団(GUF)に入団している。一九三一年に法学に関する卒業論文を書いて法学部を卒業するが、一九三三年にはフッサールの現象学に関する卒業論文を書いて哲学部も卒業した。そして一九三四年には初めて学術論文「社会法哲学における現象学の動向」を公表し、法哲学の大学教授資格も得ている。

ところが一九三三年ごろからボツビオは、ポー川を見下ろす丘の上に建つバルバラ・アラソン女史の豪邸に足しげく通うようになる。彼女は陸軍大将の娘でドイツ文学の教授、夫はスイス系イタリア人の化学技師、ボツビオと同い年の息子ジャンカルロ・ヴィックは後に著名な理論物理学者となる。じつは彼女のサロンは、一九二九年に「自由主義的

「社会主義」を唱えるカルロ・ロッセツリがパリで結成した「正義と自由」に共鳴する反ファシストの秘密集会所

ジュステイティブ・エ・リベル

となっていた(ちなみにこの名称は、一九〇六年にノーベル文学賞を受賞した国民詩人ジヨズエ・カルドゥッチの言葉「生き残った最後の女神は正義と自由」に由来する)。だが警察は、とつくの昔にその秘密を知っていた。ボツビオについても、要注意人物として内偵と電話盗聴が進められ、その記録が今でも内務省資料として残されている。そして一九三五年五月一日には一斉検挙にあつて、七日間拘留され、夜間外出禁止命令を受けていた。

ボツビオは、それから六〇年以上ものちの一九九七年に刊行した『自伝』に、国立公文書館内務省公安警察庁資料として保管されていた一九三五年七月八日付「ムツソリーニ閣下」宛嘆願書を再録している。こんな嘆願書を送つたのは、マルケ州の小都市にあるカメリーノ大学による教員公募の採用決定が取り消されることを恐れていたからである。ところが一九九二年六月二日付週刊誌『パノラマ』がこの嘆願書を国立公文書館から発掘し、ボツビオほどの著名な反ファシスト知識人にはあるまじき「醜聞」だとして大々的に報道したことから、新聞各紙でも大きな論議を呼ぶことになった(ちなみに『パノラマ』は、シルヴィオ・ベルルスコーニが所有する当時はイタリア第二位の企業集団フィンヴェスト傘下のモンドドーリ出版社が発行していた。この種の「偶像破壊」はベルルスコーニのメディア戦略の常套手段となる)。

だが考えてみれば当たり前のことだが、ファシズムの時代にニコデミズム、すなわちヨハネ福音書三章にあるニコデモのごとき偽装改宗なくして、学問を志す若者が大学教師になることなど絶対にありえないことであつた。それでもボツビオが、この「醜聞」に深く傷ついたことだけはまちがいない。まるで書齋に籠る学究の道を選んだその人生を恥じ入るかのように、自分が生きてきた激動の時代のことを思えば、自分の人生はあまりにも平凡すぎて話すに値するよ

うなことは何一つない、と言いつけるのであった。

しかしそれは事実には反する。ボツビオは一九三五年一月から、カメリーノ大学で教鞭を執り始めた。その後公募によつて一九三八年にはシエナ大学に、一九四〇年からはパドヴァ大学に移っている。こうしてトリノの実家を離れて自由になったことから、ボツビオは反ファシストの世界へと一気に接近していく。

彼が参加したのは、ナポレオン一世によつて一八一〇年に創設されたイタリア屈指の名門校であり、哲学者のジョヴァンニ・ジェンティーレが学長を務めていたピサ高等師範学校の哲学史の教授であつたゲイド・カロージェロと、奨学生として同校を卒業後そのまま事務局に勤務していた非暴力ガンジー主義者の宗教哲学者アルド・カピティーニが、一九三六年ごろから始めた地下組織「自由主義的ツチアリスモ・リベラリ社会主義」である。サヴォイア王家にも近いピエモンテの出身の陸軍大将の息子でありながら、ゴベツテイの親友で『自由主義革命』にも寄稿していたウンベルト・モツラ・デイ・ラヴリアーノがトスカーナ州のコレティーナ郊外に所有する美しい邸宅が、しばしば彼らの密会の場となつた。たまたまそこに居合わせた表現主義の画家レナート・グットウヅが、参加者を描いた素描が『自伝』には掲載されている。ボツビオは、こうした会合を通じて、フィレンツェ大学の民事訴訟法の教授で一九二五年一月にはガエターノ・サルヴェーミニやロッセッリ兄弟らとともに非合法日刊紙『屈伏するな』ソッレ・モッラレを創刊し、同年五月にはベネデット・クローチエが起草したいわゆる反ファシスト知識人宣言にも署名したピエロ・カラマンドレイのような反ファシストとも、交流を深めていった(そんなカラマンドレイでも教授職に留まるにはファシスト体制への忠誠を一九三一年に宣言しなければならなかつた。反ファシスト活動の再開には一〇年の雌伏の時を要した)。

ボツビオが非合法政治活動への決定的な一歩を踏み出すのは、一九四二年一〇月のことであつた。すでに彼はパド

ヴァ大学法学部の正教授に就任していた。その彼が、トレヴィーゾの弁護士宅で秘密裏に開催された行動党のヴェネト支部設立総会に、パドヴァ代表として参加したのである。行動党^{パルチザノ}という名称は、ジュゼッペ・マッツイーニが一八五三年に結成し、一八六七年に潰えた政党名に由来する。それはリソルジメントが裏切った共和主義の伝統の復活を含意するものであった。いいかえるとゴベッティの「自由主義革命」を嚆矢として、一九三七年にフランスで暗殺されたロッセッリ兄弟の「正義と自由」や、カロージェロの「自由主義的社会主义」が唱えた、反ファシズム闘争による共和制の実現を、目標としていた。そして一九四二年六月四日に、ローマのとある私邸で極秘裏に開催された行動党の結党集会では、「七項目」からなる基本綱領が定められた(三権分立の議會制共和国、州自治による地方分権、独占企業の国有化、農地改革、労働組合の諸権利、政教分離、欧州連邦制)。

しかし行動党はたんなる急進的改革政党ではなかった。武装パルチザン全体の五分の一に当たる三万五千人もの軍事組織「正義と自由」を擁する戦闘的革命政党でもあった(アーダ・ゴベッティは「正義と自由」第四師団の大尉となる)。それゆえ行動党にとって、反ファシズム武装闘争は国家体制の変革のための非妥協的な革命闘争に他ならなかった。一九四三年七月二五日のムッソリーニ解任後に成立し、しかも連合国との九月八日の休戦条約公表後にはローマを捨てて連合軍が占領する南部のプリンデジに逃亡したピエトロ・バドリオ元帥を首班とするサヴォイア王家の政府と妥協することなど許せないことであった。行動党にとって、国民解放委員会(CLN)は反ファシスト諸党派が妥協するための調整機関ではなく、民主主義革命を推進するための政治機関でなければならなかったのである。

ところでボツビオは一九四三年四月二八日に、ダゼリオ中等高等学校の同窓生で、八歳年下のトリノ大学医学部産婦人科教授の娘ヴァレリア・コーヴァと結婚する。ファシズム体制は同年七月二五日に崩壊したが、ドイツ軍に救出され

たムツソリーニは九月二三日ガルダ湖畔サロに「イタリア社会共和国」を樹立し、ナチ・ドイツ軍の庇護下にサレルノ以北のイタリアを支配していた。そして一九四三年一月六日、パドヴァで新婚生活を始めていたボツビオは、妻とホテルで食事中に、赴任してきたばかりの国防義勇軍の警察隊長によってついに逮捕されてしまう。そして一か月後にはヴェローナのスカルツィ刑務所の雑居房に移送される。翌年の一月一日には、ムツソリーニの女婿のガレアッツォ・チャーノを含む五人のファシスト高官の銃殺刑が執行されることになる刑務所である。

復讐心に燃えるイタリア社会共和国のわか仕立ての警察は、反ファシストよりも、ムツソリーニを裏切ったファシスト高官の摘発に血道をあげていた。ボツビオは、すでに逃亡したパドヴァ大学学長の行方を追及するために、逮捕されたのである。尋問では、学長の行方を教えなければ生きては出獄できないと脅迫されるが、結局のところ何も知らなかったボツビオは二月末に釈放される。すでにヴァレリアは妊娠していた。長男のルイージが誕生したのは、出獄して二週間後の三月一六日のことであった。

ボツビオは『自伝』において「私たちは陰謀家となることを志願していたのですが、実のところ陰謀など企てたこともない陰謀家といったようなものでした」とまるで自嘲するかのようになり、この頃のことを回想している。だが、ちょっとした運命の悪戯で、いともたやすく無数の犠牲者の一人となりうるような時代に生きていたことだけはまちがいない。そしてボツビオとして、その例外ではなかった。

ところで一九四三年一月一三日に、バドリオ政権はドイツに対して宣戦を布告した。バドリオ政権は、反ファシスト闘争を対独国民解放戦争に転換することで政権を維持し、サヴォイア王家の存続を図ろうとしたのである。これに反ファシスト諸政党は激しく反発し、国王の即時退位と国民解放委員会が組閣する臨時政府への全権移譲を求めた。英米

連合国もまだバドリオ政権を正式には承認していなかった。

しかしソ連政府は一九四四年三月一日、突如バドリオ政権の承認を発表する。また三月二十七日にはモスクワに亡命していたイタリア共産党書記長パルミーロ・トリアッティが帰国する。そして四月一日にサレルノで開催された党首会談で王制の存続とバドリオ政権の承認を提案した。これが世にいう「サレルノスワロク・デ・サレルノ転回」である。国民の総力を対独国民解放戦争に結集するというのが、その理由であった。これが独ソ戦の勝利を至上目的とする、ソ連の国益に沿った判断であることは明白であった。だが当時スターリンの権威は絶対であった。こうして共産党の強力な支持とともに、北部イタリアでの武装パルチザンによる解放地区の自立的統治を懸念しはじめた連合国の承認を得たことで、バドリオ政権とそれを継承した元首相のイヴァノエ・ボノーミを首班とする政権は、ファシズム時代の国家構造を基本的には温存することができたのである。行動党の前に立ちはだかったのは、トリアッティであった。

ところが一九四五年四月末になると、イタリア北部の主要都市は、武装パルチザンの一斉蜂起によって次々と解放されていく。スイスに逃亡を図ったムッソリーニも処刑され、四月二十九日にはミラノのロレート広場で愛人のクララ・ペタッチの遺体とともに、逆さ吊りにされてしまう。こうした「北風」の勢いに乗ってボノーミ政権は退陣に追い込まれ、六月二一日にはついに、行動党の武装パルチザンの指導者フェルルッチョ・パツリが国民解放委員会六党連立政権の首相に就任した。パツリ政権は著しく急進的であった。ナチ・ファシズムの共犯者となった経営者を追放して工場評議会の自主管理に委ねるとともに、資本課税の強化を図ろうとした。だが連合国軍政府はその撤回を求めた。さらにファシズムと結託した高級官僚の公職追放を行おうとしたが、自由党の閣僚が辞表を提出し、共産党もこれに同調したため、政権はわずか五か月で崩壊した。

一九四五年二月一〇日には、キリスト教民主党的のアルチーデ・デ・ガスペリが首相となる。それはコミンテルンにおける人民戦線の理論家であったトリアッティが、行動党よりもカトリック教徒からなる大衆基盤をもつキリスト教民主党との同盟を選択したからである。かくして国民解放委員会に結集した反ファシスト諸政党的の統一は瓦解する。そしてあつというまにキリスト教民主党的、共産党的、プロレタリア統一社会党的という三つの大衆組織政党的からなる連合政党的の時代へと移行していった。それは明白な「逆コース」を意味した。連合国すなわちアメリカ合衆国もそれを支持した。一九四六年一月に国民解放委員会が任命した県知事や警察署長が更迭された一方、三月末にはファシズム制裁高等委員会が解散となり、ファシズムと結託した旧指導階級的の責任追及が停止されて公職への復帰が可能となった。さらに法務大臣となったトリアッティは、政治犯に対する大規模な恩赦を実施する。パツリ政権によるファシスト肅清に始まる体制変革の試みは、根本から否定されていった。

パドヴァ大学に戻ったボツピオは、一九四六年六月二日の政治体制（王制か共和制か）を選択する国民投票と同時に実施された制憲議会議員選挙に、行動党員としてパドヴァ・ヴィチエンツァ・ヴェローナ選挙区から立候補した。選挙運動ではかなりの手ごたえを感じたという。しかし行動党的の得票率はわずか一・五%、七議席しか獲得できなかった。行動党的は、自由民主主義的の伝統を欠くイタリアでは、大衆基盤のない中流ブルジョワ知識人政党的でしかなかった。いかに行動党的が急進的な民主主義革命を唱えたとしても、第一次大戦前からの労働運動や農民運動的の伝統に根ざす大衆基盤を継承したばかりか、スターリンをカリスマ的指導者に抱くソ連的影響下にマルクス主義を不謬的のイデオロギーとして信奉する、社会党的や共産党的が圧倒的な影響力を行使していた左翼陣营の一角を占めることは不可能に近かった。

イタリア国民は共和制を選択した。だが行動党的は一九四七年一〇月二〇日公式に解散を決定する。それ以降、ボツピ

才が政党活動に直接的な形で関わることは、一度もなかった。

右と左

一九九四年九月八日に話を戻そう。ボツビオ教授のお宅のエレベーターを降りると、玄関でドアを開けて待つお仕着せのエプロンを着たお手伝いさんが、書斎にまで案内してくれた。書斎は広く天井が高かった。壁面を取り囲み天上にまで届く書棚には、この種の書斎にはありがちな装飾的な皮の背表紙の豪華本が整然と並んでいるというわけではなく、何の変哲もない書物や無粋な講義録のファイルがただぎっしり詰まっていただけなので、取りたてて立派な書斎という印象を受けなかった。だからこそかえって八五歳という高齢にもかかわらず、教授の現にまだここで毎日仕事を続けているのだという雰囲気、ひしひしと伝わってきた。

イタリアでは一九九四年三月二七日と二八日の両日に、それまでの比例代表制に替わる小選挙区比例代表並立制という新たな選挙制度の下で初めての総選挙が実施され、四千八百万人の有権者が投票した。そしてイタリア「第一共和制」^{ファッリマレブッリカ}は最期の日を迎えることになった。

第一共和制というのはフランスの共和制の変遷になぞらえた比喩的表現に過ぎない。なぜならば一九四八年一月一日から施行されたイタリア共和国憲法に、例えば大統領制の導入といった重大な修正が加えられたわけではないからである。それにもかかわらず、戦争や革命や内乱やクーデタが生じたわけではないのに、キリスト教民主党、共産党、社会党、社会民主党、共和党、自由党といった第二次大戦後のイタリア政党システムをほぼ五〇年にわたって構成し続けて

きた伝統的な諸政党が、この総選挙と相前後してすべて消滅したことを念頭におくならば、第一共和制の終焉というの
もあながち誤った表現とはいえない。

そしてフォルツァ・イタリアや北部同盟といった新興勢力に、これまで政権から排除され続けてきたネオ・ファシス
ト政党であるイタリア社会運動を前身とする国民同盟が加わったシルヴィオ・ベルルスコーニ首相の率いる「中道右
派」連立政権が誕生した。

ボツビオ教授は、この総選挙直前の一九九四年二月に、『右と左―政治的区別の理由と意味』という百ページ足らず
の小さな本を世に問うていた。フランス革命以来、ほぼ二世紀にわたって政治の世界を対立する二つの部分に分けるの
に用いられてきた左右の区分が、もはや時代遅れであるといわれて久しいが、果たしてそういえるのであろうか。

左右の区別は、イデオロギーの終焉によって無意味となったというけれど、イデオロギーが地上から消滅したことは
未だかつてなく、イデオロギーの終焉を唱えること自体が実はイデオロギーとはいえないであろうか。あるいは多元主
義的な民主主義のもとでは、政党システムがその中央⇨中道に位置する第三極に収斂していく傾向があるから、左右の
区別は無意味となるというけれど、それは本当だろうか。「あれか、これか」という左右の区別ではなく「あれも、こ
れも」という左右の区別を乗り越えた第三の道があるというかもしれないが、実は、それは左右いずれかの立場から相
手側を自らに引き寄せて中立化することにより、危機に陥った自分自身の立場を救いだそうとする試みに、他ならない
のではないだろうか。さらに、自然環境を争点とする緑の運動や堕胎のような生命倫理を争点とする新しい社会運動
は、左右の区別を時代遅れとするかに見えるけれど、そうではない。そうした運動であっても、問題を突きつめてゆけ
ば、結局のところ左右の区別が不可避となるのではないだろうか。

また、冷戦後のソ連を始めとする共産主義体制の崩壊によって、左翼は消滅したといわれている。かつて左翼が隆盛であった時代には、まだ右翼に存在理由はあるのかと問われてきた。今では左翼の存在理由が問われている。まだ左右の区別が残っていると、いろいろな左翼」と「いろいろな右翼」がいるだけで、新しく複雑な個々の現実を前にした場合には、いずれもがほとんど同じことしかいわなくなっているという。だから、もはや左右の区別は虚構となつてしまったというけれど、果たしてそういえるのであろうか。

そこでポツピオ教授は、左右の区別とは別に極端主義エクトレミズモと穏健主義モデラテミズモの区別を立てることを提案する。左右の極端主義（過激主義）に共通する特徴は、反啓蒙主義的（時には非合理主義的）で破局論的な歴史観であり、英雄主義的で反民主主義的な政治観である。他方、穏健主義は、漸進主義的で進化論的な歴史観を特徴とする。そしてそれは、民主主義の本質ともいえる相対立する利益のあいだの妥協には不可欠な前提となる、慎重・寛容・打算・調停といった商人的な美徳とも親和的である。すなわち極端主義と穏健主義の違いは方法に関わり、右と左の違いは価値に関わる。だから左翼と極端主義を混同してはならないという（ちなみにポツピオ教授は、一九八三年の講演で『柔和エロジオ・テラミテツツと礼讃』という道徳哲学論を公にしている）。

それでは左右の区別とは一体何を意味するのであろうか。ポツピオ教授は政治的表象においては、未だに空間的時間的隠喩（例えば左右、上下、高低、深淺、遠近、前後、新旧など）を用いた二元論が機能し続けていることを再確認したうえで、左右を区別する基準とは何かを探っていく。そして、それは平等という理想に対する態度の違いにあるとする。さらに具体的には、何らかの差別を正当化するか否かに関わるものだとする。

今では性、人種、言語、宗教、政治信条などによる差別の撤廃や教育権・労働権・健康権といった社会的諸権利の承

認は、左右の別なく当然のこととされている。だが平等という理想を追求する社会主義運動がなければ、それが実現することもなかった。それは左翼の最も輝かしい成果なのである。たしかに共産主義が唱えた平等主義のユートピアは理想とは正反対のものとなってしまった。歴史のなかの共産主義は敗北した。だがそれが挑戦しようとした課題は未解決のまま残っている。左翼にとって平等という理想は、これまでも見つけてきたし、これからも見つけ続ける北極星のようなものである。左翼はその役割を終えたところか、やっとそれに取りかかったばかりなのである。

『右と左』はボツビオ教授がこの総選挙に向けて著した遺書ともいえるマニフェストであった。しかし一九九四年の総選挙後に私を前にした教授は、アームチュアに深く腰を下ろしながら、いいようもなく淋しそうな表情で、こう言ったのである。イタリアの自由主義はこの総選挙によって三度目の敗北を喫しました。一度目はいうまでもなくファシズムによつてです。二度目はキリスト教民主党によつてです。そして三度目はベルルスコーニによつてです。ボツビオ教授は、たしかに左翼ではなく、自由主義が敗北したといった。一九九五年の『右と左』改訂版ではゴベッティの恩師であり、後に大統領にもなったイタリアを代表する自由主義経済学者ルイジ・エйнаウディの最終講義『自由主義と社会主義の類似点と相違点をめぐる基本的考察』が生涯にわたる座右の書であつたとして、次のような言葉を引用している。「自由主義的な人間と社会主義的な人間は対立するといえども敵どうしではない。なぜならば両者ともに相手の意見を尊重するからだ。また自分の原則が実現されるだけでは限界のあることを知っているからだ」。「最適解は全体主義的専制が強制する平和のなかでは得られない。それは自由主義と社会主義という二つの理想のあいだの、どちらかが負けると共倒れになるという、不断の闘いを通して得られるのである」。

ボツビオ教授は自由主義者であり社会主義者であつた。それが教授のいう左翼だつた。

シルヴィオ・ベルルスコーニは左翼政権の誕生阻止を至上命題として政界に出馬した。イタリア共産党は、ベルリンの壁が崩壊した三日後の一九八九年一月一二日に、アキッレ・オットケット書記長がボローニャの下町ボロニーニャでのパルチザン闘争四五周年記念集会において突如路線転換を提唱したことをきっかけとする激しい党内論争を経て、リミニで開催された第二〇回党大会の最終日の一九九二年二月三日に解散を決定し、その七一年に及ぶ歴史に終止符を打って、新たに左翼民主党と名乗るようになっていた。

思えばポツピオ教授は、イタリア共産党のもつとも誠実な対話者であると同時に、もつとも容赦なき批判者でもあった。一九五五年にはロデリーゴ・ディ・カステイリア（共産党書記長トリアッティの筆名）の自由主義批判に対して「自由と権力」という論文を著し、自由主義をブルジョワ権力にとつての自由の理論と実践ではなく「国家権力の制限をめぐる理論と実践として捉えるならば、特に全知全能を誇る国家が数多く見られる我らの時代に、自由主義を厄介払いしてしまうなどというのはとてつもなく難しいことである」と反論していた。そして自由主義の伝統に基づく市民的諸自由と民主主義に起源をもつ政治的諸自由、さらには労働運動の成果である社会的諸権利は、決して過去の残滓や少数者の特権などではなく、人格を有するすべての個人にとっては譲り渡すことのできない遺産であると述べて、個人をまるで国家機構の全体性を構成する一部品であるかのように扱う共産党によるプロレタリアート独裁国家を、厳しく批判していた。

それにもかかわらずポツピオ教授は反共主義者ではなかった。というのもイタリア共産党が、勤労者大衆の解放と社

会的諸権利の推進に貢献したのみならず、反ファシズム・レジスタンス闘争の先頭に立って、これを勝利に導いたことにより、イタリア共和国の成立とイタリア共和国憲法の制定に決定的な役割を果たしたことを、高く評価していたからである。

ところが選挙運動中のベルルスコーニは、すでにイタリア共産党が消滅したのに、イタリアは共産党政権になれば自由のない「収容所列島」になってしまったといった「反共」宣伝を繰り返していた。それは彼の所有する世論調査会社ディアクロンがフォーカス・グループを用いたマーケット・リサーチを行った結果、「反共」がネガティブ・キャンペーンにはまだもつとも効果的な政治シンボルであることを、発見したからに他ならない。その意味においてベルルスコーニはイデオロギッシュな右翼でもなければ反共主義者でもなかった。

ボツビオ教授は、ほんとうに「いやな感じ」^{アリア・チニカ}がするね、と目を伏せた。そしてこう続けた。ベルルスコーニには、彼に好意的な論者がいうような、ポスト冷戦時代にふさわしい新しさや爽やかさなど微塵も感じられない。そもそも彼は自由主義者ではない。じつは自由などどうでもよいのだ。むしろそんな理念^{コンセプト}から自由^{ディカート}であるからこそ、選挙戦略の必要に応じてそのつど有用なシンボルを、シニカルな合理性にもとづいて選んでいけばよいと考えているのだ。

イデオロギーの終焉といい、右も左もなくなくなったといいながら、そこに生じたのはイデオロギーの「真空状態」^{ヴァククオ}なのではないか。まるでパンドラの箱が開けられてしまったかのように、かえってイデオロギー的には何でもありの状態となってしまう。しかもそこに噴出してきたのは、戦後民主主義体制の下ですでに乗り越えられたと思われてきた右翼的で反動的な諸潮流であった。「歴史の終焉」といわれて、世界で自由民主主義が最終的な勝利を収めたとされる冷戦後の状況のなから、それまで封印されてきた伝統主義的で非合理主義的な反動的言説が、ときにはポスト・モダン

的な色彩を帯びつつ復権し始めたのである。

ベルスコニ政権には、戦後初めて、五人ものネオ・ファシスト（国民同盟）党員が入閣していた。黒シャツではなくダブルのスーツを着た戦後生まれの国民同盟書記長ジャンフランコ・フィーニは、ポスト・ファシストと称しつつ、ムッソリーニを今世紀最大の政治家だと公言して憚らなかつた。また国民同盟の議員たちは、イタリア共和国憲法補則一二項「解散となったファシスト党の再建はいかなる形であれ禁止する」の廃止を求める憲法改正案を、下院に提出した。さらにレジスタンスの勝利を祝う四月二五日の「国民解放記念日」に替えて、第一次大戦の開戦記念日である五月二四日を「祖国の祝日」とすることを提案していた。だから一九九四年五月四日欧州議会は、イタリア共和国大統領エウジェーニオ・スカルファロに対して、新内閣からネオ・ファシスト閣僚を排除するよう異例の勧告を行ったのである。

ボッビオ教授は「ファシズムと反ファシズムを等距離において見ることなど断じてできません。警察国家と法治国家が同じものだとはいえるのか。ファシズムが、世界で初めてイタリアに誕生したのは私たちの恥でしかないことを、若い人たちも理解しなければなりません」と語気を強めて述べ、歴史修正主義の流れがますます強くなり、反ファシズムとレジスタンスという戦後民主主義の正統性の根拠が相対化されていくことに、強い危惧の念を示した。

さらに教授はこんなことも話題にした。イタリアの戦後政治を長期にわたり支配してきたキリスト教民主党が政治腐敗と統治能力の喪失によって解体してしまい、キリスト教民主主義の下でのカトリック教徒の政治的統一という原則が消滅したとたん、すでに克服されもはや過去の亡霊と考えられてきたカトリック非妥協主義や伝統主義、あるいはインテグラリズム（カトリック原理主義）の諸潮流が、ここぞとばかりに息を吹き返してきたのです。

イレエネ・ピヴェッティという弱冠三二歳にして、イタリア史上初めて女性の下院議長となった女性をご存知でしょうか。彼女はイタリアの国家統一の歴史を否定し、北部の分離独立を唱えるウンベルト・ボッシの率いる北部同盟に属しています。それなのに、フランス革命において一七九三年にカトリック王党派が起こしたヴァンデーの反乱に因んだ十字架をつねに胸にして、それまで使用されていなかった下院議事堂の礼拝室でミサを立て、この八月にはリミニで開催されたカトリック原理主義共同体「コムニオーネ・エ・リベラツィオーネ 聖餐と解放」の「フェスタ・デッラ・ミサイア・ボボラーレ 人民友好祭」に出席して、フランス革命がもたらした無神論が諸悪の根源であると演説したと聞いています。

キリスト教民主党が大混乱に陥るなかで、一九九三年七月にイタリア人民党と改称されたときに幹事長に抜擢されたのは、テラーモ大学の政治哲学教授ロッコ・ブッティリオーネでした。彼は「聖餐と解放」のイデオログです。それまでカトリック系の学界でも無名の人物であり、教皇ヨハネ・パウロ二世の伝記を書いたことによる教皇との個人的な縁故関係が、彼の唯一の政治的「資源」だったのです。ボツピオ教授は、こんな知的にも凡庸で時代錯誤的なインテグリティスタ（カトリック原理主義者）が、政界の表舞台に登場することになるとは夢にも思わなかったと述懐した。

ところで「聖餐と解放」はミラノの司祭ルイージ・ジュッサーニが一九五四年に始めた学生青年会を起源とする。そして第二ヴァチカン公会議（一九六二―六五年）に始まるカトリック教会の「アツツヨルナメント 現代化」に伴う世俗化の進行と、一九六八年の五月革命以降の左翼急進主義の台頭に強烈な危機感を抱いたことから、一九七〇年代に入ると心理療法（カルト）的改宗手段を駆使して在俗信者（なかでも学生）を折伏するカリスマ的共同体へと発展していった。すなわち聖職者位階制に従属する公式の在俗信者組織である「アツツヨルナメント イタリア・カトリック活動団」（ACI）の形骸化とルーティン化に対抗して、ジュッサーニ師というカリスマ的指導者の下での自発的で戦闘的な在俗信者による「下から」の改宗

運動によって「再キリスト教化」を推進しようとする、カルト的かつセクト的な「コミューニケリアン・インテグラリズム」の性格を強めていった。ちなみに「人民友好祭」は、一九七九年以来毎年八月の終わりにリミニで一週間開催されるもので、彼らが邪悪視していたイタリア共産党の「ウニタ祭」^{註一}を模倣したものであることは明らかであった。

じつはブッテイリオオーネの恩師であり、「聖餐と解放」の理論的支柱でもあったカトリック思想家アウグスト・デル・ノーチェは、ボツピオ教授のダゼリオ高等学校における同級生でもあり、一九六〇年代にトリエステ大学に職を得るまで不遇の時代をトリノに暮らし続けた。デル・ノーチェは若き日にマルクス主義を含む様々な思想遍歴を経たのちに、神なき「近代」をデカダナスへの不可避免的な過程とみなす、フランス革命の時代にサヴォイア家に仕えたジョゼフ・ド・メーストルらの伝統主義的な反動のカトリック思想の再評価へと辿り着く。そして第二ヴァチカン公会議に始まるカトリック教会の現代化や、それによって正統性を獲得したキリスト教民主主義の思想を、無神論的な近代に屈伏して聖なる教会の伝統を否定するものとして厳しく糾弾した。またマルクス主義やロシア革命、さらにはファシズムをも、神なき時代に必然的に生じる逸脱現象だとする独自のカストロフィア破局論的な現代史解釈を展開した。

ひょっとするとこんな時代錯誤の反動思想も、歴史を何一つ知らない若い人たちの眼には、目新しくて新鮮なポスト・モダンの「新商品」と映っているのかもしれない。そういつてボツピオ教授は深いため息をついた。ポスト冷戦の時代に生じた、そんな何ともいいがたい鬱屈した雰囲気、教授はシニシズムという言葉で表現していたのである。

*本稿は「追憶のなかのボツビオ教授」『神戸外大論叢』第五八巻・第五号（二〇〇七年一月）を改稿したものである。それゆえ本旨に変わるところはない。強いて異なる点を一つあげるとするならば、私の記憶に残る最晩年の教授の姿をあえて文字による記録に留めようとしたことである。トリノでは二〇〇九年一〇月一五日―二〇一〇年一月二〇日にボツビオ生誕一〇〇周年を記念する行事が全市をあげて行われた。また二〇一一年はイタリア統一五〇周年に当たる。私の記憶に残る晩年のボツビオ教授はすでに歴史上の人物となりつつある。今は亡き教授に心からの敬意と深い哀悼の念を表するものである。